今治歴史散歩

大成経凡

第四回　海事都市の身近なルーツ

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第4回は、今治の海事遺産と海事産業のおこりについて紹介し、海事都市・今治の身近なルーツを歴史散歩したいと思います。

●来島海峡の航路整備と小島砲台

日本三大急潮流の来島海峡は、海上交通の要所としても有名です。この海峡航路が整備されるのは、明治三〇年代になってからで、増え続ける通航船舶に対応したものでした。明治三三（一九〇〇）年四月二〇日に中渡島灯台、同三五年四月一日に大浜灯台とコノ瀬灯標（現、唐子浜の赤灯台）が業務を開始しています。

波方港の赤煉瓦灯明台
（玉生八幡神社境内）

同じ頃、小島では明治三二年から同三五年にかけて、陸軍芸予要塞の一つである来島要塞が築造されています。この要塞は、ロシア・バルチック艦隊の同航路通峡阻止を目的としたもので、現在も中部堡塁・北部砲台・南部砲台の遺構が島内に確認できます。また、同航路の整備は、戦時における海上輸送路確保の意味もあったと考えられ、陸路は山陽鉄道の整備（広島～下関）が同時並行で進められています。

●波止浜の浜旦那と波方船主

明治初年の波止浜の塩田規模は、四二軒約六三ヘクタールでした。さらなる塩田用地の拡大を望めないと判断した浜旦那は、多角事業の経営に乗り出します。

その象徴的存在が八木亀三郎（升屋）で、彼はシベリア鉄道着工を好機ととらえ、ロシア沿海州に拠点をもちます。現地の巨商と波止浜塩の輸送を特約し、サケ・タラの輸入にもたずさわります。後に北洋のカニ漁業に進出し、大正一三（一九二四）年に業界初の三千トン級蟹工船・樺太丸を竣工させ、他にも美福丸・春山丸という蟹工船を所有していました。

同じ頃、波方船主の多くが製塩用石炭の輸送に従事し、筑豊・宇部などの石炭積出港と瀬戸内の塩田産地を往来。波方港の赤煉瓦灯明台は、彼らの寄進によるもので、建てられたのは明治後期～大正初年頃と考えられます。

●波止浜湾に誕生した近代造船所

愛媛最初の洋式造船所は、波止浜湾から誕生しています。波止浜有数の浜旦那・八木光三郎（丹波屋）を発起人代表とし、明治三五（一九〇二）年五月に設立されるのが、波止浜船渠㈱でした（現、㈱新来島波止浜どっく）。工場用地は、大浦浜の塩田一軒があてられ、ここに石垣ドライドックがつくられます（写真参照）。

大正期になると、同社の経営は松山の造船実業家・石崎金久に委ねられます。しかし太平洋戦争が始まると、同社は住友財閥の傘下となり、新造船台と新たなドライドックが二基つくられます（ともに現存）。

一方、同社を去った石崎は、赤崎浜の塩田二軒を造船用地に替え、伊予木鉄造船㈱（後の波止浜造船㈱）を設立。また同じ頃、戦時統制下の企業合同で、小浦に今治造船㈱が誕生しています。昭和戦後の愛媛の造船業界は、以上の三社が牽引役を果たし、発展していくことになります。

昭和初年頃の波止浜船渠
（写真／石崎重久氏所蔵）